琉球大学学術リポジトリ

現代子ども論研究ノート(1)
ー子どもを見る目をどう養うか・再論ー

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部
	公開日: 2007-07-19
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 藤原, 幸男, Fujiwara, Yukio
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/1106

現代子ども論研究ノート(1)

―― 子どもを見る目をどう養うか・再論 ――

藤 原 幸 男*

A Note on the Theory of Modern Children**

Yukio Fujiwara

はじめに

私は先に『現代教育科学』1983年8月号で「子どもを見る目をどう養うか」を提案した。拙論に対して6氏より批判を受け，さらにその後自ら検討していくなかで，いささか総花的であったことに気づいた。そこで，この問題について非行・問題行動を中心に本稿で再考することにしたい。

1.「子どもが見えない」状況と非行・問題行動

私は先の提案で，子どもの問題現象として，

① 人間把握の一面性

② 差別・弱い者いじめ，残忍な行為・行動の強化

③ 生活の技・知恵の衰退，退廃文化の血肉化

④ 人生への見通し・展望の欠落

の四点を指摘した。いうまでもなくこれらはバラバラに存在するわけではなく，相互に深い関連をもっており，これらの総体として今日の子どもがあるのである。人間把握の一面性は差別・弱いものいじめという形で現象することが多いし，生活の技・知恵の衰退は残忍な行為・行動となって現われることが多い。これらを包んでいるのは，早い時点から自分の人生に見通し，展望がもてないという閉塞感であろう。

近頃「最近の子どもが見えなくなった」「わからなくなった」という声をよく聞く。それは，上記の問題現象のうちで②に関わって言われることが多い。子どもの問題現象は多面にわたって現われているが，教師として「子どもが見えない」状況と深く関わって論議されるのは，②の「差別・弱い者いじめ，残忍な行為・行動の強化」なのである。それは単なる行為・行動の問題ではなく，そうした行為・行動の背後にある道徳性のくずれが問われるからである。行為・行動の重大さもさることながら，それにともなう意識のくずれを大きな問題と考えるからである。

横川嘉範は，今日の子どもに見られる残忍な行為・行動について次のように述べている。

「水洗トイレの中にロールのままのトイレットペーパーを投げ込んだり，給食のパンやおかずを流し込んだりする。また，そうたびたびじゃないが図書室の新しい椅子のレザーが鋭利な刃物でスーッと切られていたりする。

ところが，さらに問題なのは，トイレの件にしても，刃物の件にしても，それをどの子がやったのかわからないのね。一と月たっても，二た月たってもわからない。これは無気味なことなんだ。さっきは，素直で聞きわけのいい子どものことを話したけれど，しかしその〝いい子〟が裏側じゃ何をやっているのか，つかみきれない。〝いい子〟の裏側に，どんな不満がひそんでいて渦まいているのか，それがはっきりと見えない」[1]

なぜ「ふつうの子」が残忍な行為をするのかがわからない。横川はその背後に子どもの不満をみ

* (Recivel August 20, 1983)

** 琉球大学教育学部教育学科

てとっている。それにしても，どんな不満があり，どんな気持でこんな行為をするのかが読みとれず，どう対応してよいかとまどってしまうのである。

子どもの残忍な行為はモノに向けられるだけでなく，ヒトにも向けられる。とりわけ，級友のなかで力の弱いものに対して「いじめ」行為を展開する。こうした「いじめ」行為に対して，それは昔から存在した。そういう世界をくぐって子どもは社会性を身につけてきたのであって，心配することはない。と指摘する人もいる。しかし今日の「いじめ」行為は昔のそれとちがい，様相を異にする。まず罪悪意識がない。遊びのつもりでいじめている。

ある座談会で，次のように報告されている。

「田宮　ショッキングな事件が相次いで報じられていますが，『弱いものいじめ』などはありますか。

釈　ありますね。ふざけて遊んでいるというんですが，弱い子をいじめているんです。『なんであの子ばかりいじめているんだ』と聞くと『お互いにいじめっこしてふざけているんだ』というんです。ところが，その子に『君はいじめられたことはあるのか』と聞くと『ない』。自分の矛盾に気がついていないようです。」[2]

いじめられる方にも，いじめられているという意識が弱い。また，いじめ方が陰湿であり，正義を主張するものにも，いやそういうものに対してこそ激しい攻撃を加えている。これらの点で，昔の「いじめ」行為とは異質のものと見なければならない。

近年，とりわけ1970年代後半以降，こうしたモノ・ヒトへの残忍行為・破壊行為がめだって増加しており，大きな問題となっている。こうした行為は非行とは異なるが，性格からいえば非行に隣接するものである。実践家のあいだでは，こうした行為を問題行動として位置づけ，取り組みを展開している。

前沢泰は，次のように述べている。

「今日の生活指導は，いわゆる非行および非行とはややことなる問題行動への取り組みを避けて通ることはほとんど許されないほど，それは大量化し，一般化している。……いわゆる非行とは，殺人・暴力・不純異性交遊・薬物吸飲・飲酒・喫煙・窃盗・万引・無断外泊・家出等々，流行・慣習・習俗・道徳・法などの行為の規範に照らして社会的規制の比較的強いものへの違反行為のことである。これに対して問題行動とはより社会的規制の弱いものからの逸脱行為のことで，陰湿・残酷ないじめのようなサディスティックな攻撃行動や退廃的な自閉行動や，マゾヒスティックな自己破壊的行動を指す。そして，これらは量的に拡大しただけではなく，低年齢化の傾向とともに一見普通児と思われる子どものなかにもその徴候が現われていて，それが非行や問題行動の多発・日常化の温床となっているのである」[3]

60年代に阿部進が「現代っ子」論を提起したときには，現代っ子の「ドライさ」がわからないと言われたが，80年代にはいって，これとは違った意味で，現代っ子の「問題行動」がわからないと言われているのである。しかも現代っ子の「問題行動」にあっては，その行動のみならず，背後にあるはずの意識が読めなくなっている。おそらくは何らかの不平・不満が渦まいているのであろうが，それが子ども自身に自覚されておらず，教師に見えなくなっているのである。

2. 子ども・教師をとりまく時代閉塞的状況と非行・問題行動

かって藤井敏彦は，「『人間は社会的諸関係の総体である』（マルクス）といわれるが，とくに子どもは社会を映す鏡である。子どもはおとなの鏡であり，親の鏡であり，教師の鏡である。おとなが，過去の慣習や伝統的価値体系に大きく拘束された現在に生きるとすれば，過去によって規定されることの少ない子どもは，変化し発展してやまない現在そのものを，より純粋に体現し，それと同時に，訪れようとしている未来を鋭敏に予示する。したがって，子どもを知ることは，現在の社会を知ることであり，その中に投影されている未来を予知することである」[4]と述べた。

子どものなかに現代社会を見るわけである。このような視点は重要である。子どもが見えなくなったのは，現代社会のゆがみが子どもに如実に反映されているにもかかわらず，大人が子どものなかに現代社会のゆがみを見きれないことにも起因する。こうしてみると，マクロな視点から子どもを

とりまく社会状況を分析し，それと重ねあわせて現実の子どもを見る必要があるといえよう。

子どもをとりまく社会状況を分析してみると，一つには商品化の進展，二つには能力主義・管理主義の教育体制を指摘できる。両者は現代の子どものなかに深く投影され，両者の重なりによって種々の問題現象が生みだされていると見ることができる。

最初にあげた商品化とは，子どもをとりまく事物が商品でいっぱいであり，商品による擬似的世界のなかに子どもの生活が押し込められていることを指す。こうした商品化は60年代以降の高度経済成長のもとで急速に進行し，子どもの生活構造を急変させた。子どもというものは，家庭生活に参加し，一定の仕事を遂行することによって家族を認識し，生活リズムを確立し自立していく。ところが商品化の進展は，家庭生活から子どもの家事労働を不必要とし，仕事をとおしての結びつきを弱くしていった。その結果，仕事に付随して形成されていた生活技術は獲得されず，そのために生活リズムの崩れを生じた。生活リズムは子ども自らが周囲のモノに自覚的に働きかけることによって確立されるが，働きかけるにもモノがなく，それにともなう生活技術も獲得されないために，その確立が困難になっていった。

70年代後半になって高度経済成長はゆきづまり，低成長を迎えるが，低成長は商品化の進展に歯止めをかけるどころか，サービス産業にまで食い込み，商品化をいっそう進展させた。流通サービス業では需要の拡大テンポが小さくなったにもかかわらず賃金水準が高く，相当生産性を向上しないと収益は拡大しない。都合の良いことに，高度成長期に開発された種々の自動化技術を導入すれば，かなり生産性を向上させることができる。たとえば，「外食チェーンでは料理の工場生産化によって，原材料コストの引き下げ，人件費の節約，料理やサービスの均質化，スペースの有効利用等のメリットをあげられる。量産化の基礎には，自動的に温度が調節される加熱装置，自動包装装置，瞬間冷凍装置等，多様な技術進歩があった。外食チェーンのコストは工場生産によって15％程度低下したという」[5]のである。外食産業における機械化・自動化は外食ないし外で買って家で食べる習慣を生みだし，家庭生活における食事労働の位置を相対的に低下させた。サービス業における機械化・自動化は食事以外の分野にも大きな影響を与え，全体として家庭生活における家事労働の比重を著しく低下させた。その結果，家庭生活における子どもの家事労働をますます不必要とし，心情的一体感だけで結ばれた「ホテル家族」[6]の様相を呈するに至ったのである。

こうしたなかで仕事の重要性を再認識し，家庭における家事労働の見直しをすすめる動きもでている。[7]

商品化の進展はさらに遊び領域にも深く入りこみ，子どもの遊びの性格を著しく変えていった。子どもは地域の遊び仲間と交わり，遊び活動を展開していくなかで社会性を広げ，人間としての生活技術や社交術を身につけていったものだが，久富善之の分析によれば，商品化の進展は，①商品への欲望の不断の刺激，欲望の肥大化，②生活体験の受動化・浅薄化を生み，「前の商品による遊びで鍛えた知恵や技術は次々とスクラップ化する」という形で，③地域の子ども文化や子ども集団の切断・解体化を生んだ[8]という。こうした事態は70年代後半の経済の低成長期になっていっそう促進された。というのも，先にみた自動化技術の進展は子どものオモチャの世界にも入りこみ，ゲーム・ウォッチやマイコンをもオモチャの世界にとりこんでいったからである。[9] こうして，地域の子ども集団で何か創造的文化をつくりだし技を向上させていくといった風習は喪失し，黙々と商品相手に熱中する子ども群を大量に生みだすことになったのである。

高垣忠一郎は，こうした仲間集団の解体は少年期における自立を困難にしているという。高垣によれば，「少年期における自立の課題は，たんに自律的な能力の形成によってのみ達成される性質のものではなく」，「これまでの親やおとなへの依存から，心理的に自らを分離させることをあわせて実現してはじめて達成される」のであって，親やおとなへの自己主張や反抗，自立へのもがきが生活の崩れとして現象してくるのだ，という。「こうした危機を生きる少年期の子どもたちにとって，同年輩の仲間たちと展開する集団活動や，そこに形成される自分たちの世界や心のきずなは，

親やおとなからの心理的な分離を実現し，自立を達成してゆくうえで，不可欠の媒介者としての意義を担っている」のだが，今日では，「一方で少年期の仲間関係や集団活動がやせほそり，解体化してゆく」し，「他方で……しばしば『万引』に代表されるように，商業文化の子ども世界への侵入のもとで，消費的な快楽を追求するものへとゆがめられる傾向がある。また，そこに実現する自分たちの世界は，暴力文化や嘲笑文化の影響をもうけて，暴力やいじめが幅をきかせ，正義と友情のモラルにかわり，暴力と同調のモラルが支配しがちである」。こうした傾向は子どもの自立に不利な状況である。とりわけ後者の傾向は親やおとなにも気がかりな状況である。親やおとなの干渉や管理主義的対応が強まり，子どもは「よい子」になって自己を失うか，反抗して「自律的な能力の未熟なままに，自立へと旅立つ危険を犯すか」の選択に迫られる。こうして少年期の子どもたちは苦悩し，その「苦悩はしばしば非行や校内暴力という形であらわれ」るという。こうした理解をもとに，高垣は，「よい子」への陰湿ないじめは，「悪童たちの目には，そうしたよい子が，自分を失い，おとなの管理や支配に甘んじ，迎合する存在としてうつり，内面の葛藤を喚起され，感情を逆なでされる対象として感じられている」ことによるのではないか，という。[10]

高垣の指摘には学ぶべき点が多い。しかし，商品化の進展に起因する遊び仲間の解体・変質だけが子どもの発達のゆがみを生んでいるわけではない。それと同じぐらい子どもの心に重くのしかかっているのは，学校教育のありようである。現代の学校は能力主義・管理主義の様相を濃くしている。そのなかで知らず知らずのうちに教師も能力主義・管理主義のとりこにされ，教育活動を事務的に処理しようとする傾向が強まっている。能力主義的競争のなかでは，子どもたちのだれもがいつ落伍者となるかもしれない。だれもが転落の可能性をもっているわけで，転落への不安が子どもをおおっている。能力によって先行きが決まっていると多くの子どもが感じている[11]し，能力があって第一段階を突破したとしても，第二段階を突破できるとは限らない。だから人生への明るい見通し・展望がもてず，たくましい生活意欲があるはずがない。しかも能力主義は管理主義を呼び込む。能力主義のもたらすストレスは管理主義によって押し込められ，自主性の発達はさえぎられている。その結果，陰湿な形で欲求不満を解消するということになる。その現われの一つが，今日における非行・問題行動だともいえる。

竹内常一は，能力主義・管理主義の教育体制に非行・問題行動の根源をみる。さまざまな非行・問題行動に接し，その傾向を分析するなかで，非行・問題行動には次のような発生メカニズムがあるのではないかという。竹内の指摘は，現行の学校教育体制を撃ち，その再生を視野におきながら非行・問題行動の発生過程を語っていて，教育実践論の視点からみて重要である。

竹内によれば[12]，能力主義的選別体制はそれによりそう行動と心性を子どもに生みだし，子どもは能力主義的基準に達しない自己を攻撃していくようになる。

「子どもは能力主義的な選別のなかで，つねに外からの評価にさらされる。そのなかで，子どもは能力主義，管理主義をとりこんで，『勉強しなければならない』『シャンとしなければならない』と信ずるようになるが，そうなればなるほど，できない子どもは自己を苛酷に評価しなければならない。なぜなら，能力主義，管理主義が子どものなかに巣くえば巣くうほど，評価は外からだけでなく，内からも行なわれるようになるからである。子どもは外からも，内からも，『おまえはバカだ』『無能力者だ』という声をきくなかで，自己卑下，自己侮蔑の態度を強めていく」

だが，こうした異常なまでの自己抑圧はもう一人の自己を呼びおこし，一方では自閉・退行行動を生みだし，他方では逸脱行動を生みだす。そうしたなかで，子どもたちは失われた自己をとりもどし，自分の「世界」を確立しようと旅立つのであるが，その旅立ちは必ずしも自立へと子どもを導くとは限らない。というのは，「幼児体験，少年体験の不足から，子どものなかに原質的な自己がつくられていないことがしばしばある。基礎的生活習慣の欠落，文化としてのからだの欠落，家族と共有した原初的な共存感覚とそのなかで獲得する自己感覚の欠落のために，さらに長く原質的な自己を求めてさまよわなければならない子ども

もいる」からである。さらに，「甘やかし，過保護が，強制，過干渉と深く結合しているために，すぐに能力主義，管理主義に送りこまれてしまい，悪循環を重ねる子もいる。また，その甘やかし，過保護が，子どもの未成熟な自己，その自分本位性に無原則に追随するものであるばあいは，子どもの自己再認の試みを拡散させ，それを自他に対する攻撃性に仕立てることもある」からである。「未成熟な自己」にあっては自他への攻撃性を増すことから，自己への攻撃的，破壊的傾向はやがて他者へのそれに発展していく。こうして陰湿な「いじめ」が現象として現われてくる。「はじめは，抑圧された欲求の衝動的充足――衝動的攻撃性として現われるが，それはやがて他者に対する攻撃性，破壊性を顕示しあうゲーム的競争へと発展をとげ，そこに差別と迫害の体系をつくり上げていく」のである。

竹内の見解では，「いじめ」をはじめとする非行・問題行動は現代学校の能力主義・管理主義の産物だということになる。そうした非行・問題行動の露出を促しているのが，幼児からの生活規律の欠落，充分な甘え体験の欠落，商品化による退廃文化の浸透と遊び集団の質的変化（解体）などだということになる。

3. 実践的糸口をどう切り開くか

竹内のいうように，非行・問題行動が現代学校の能力主義・管理主義の産物だとすれば，解決の糸口をその克服に求めなければならない。だが，教師みずからも能力主義・管理主義のとりこになって，知らず知らずのうちに能力主義的・管理主義的教育に加担していることも多い。教師の内面にまで浸み込んでいるわけである。だとすれば，能力主義・管理主義の克服に踏み込むことは外なる敵を倒すことだけではない。いやむしろ教師の内面における内なる能力主義・管理主義の闘いを押し進め，そこにおけるもう一人の自己を見つめて闘いを組織することでもある。

竹内常一はこのことと関わって次のように述べている。

「一言で能力主義，管理主義に対して毅然とした態度をとるといっても，そう簡単にできるものではない。それらは，今日では，体制的な支配として教師を拘束している。具体的には，それは学校経営の重層構造化，教育活動の効率化，『事務』化，研究の儀礼化，形式化などとして，教師を二重にも，三重にもつつんでいる。そればかりでなく，それは教師の内部にも深く浸透し，内側からも教師を支配するようになっている。昨年度の大会基調提案は，教師の内部にも自他に対する攻撃的破壊的傾向が生じ，それが子どもに対する差別・迫害を生んでいると警告している。」[13]

「わたしたちが内と外との能力主義と意識的にたたかうことができ，その屈折したたたかいを意識できてこそ，はじめに見てきたような子どもの倒錯した反抗とその苦悩に共感でき，それを理解し，そのたたかいに参加できるのである。いや，子どものたたかいを知り，それに参加してこそ，また自分のたたかいを意識的に進めていけるのではないだろうか。」[14]

ここには，子どもの非行・問題行動をわが身に関わりないこととして「教師」的視点から迫るのではなく，まさに同時代人としてその苦悩をともにしながら共にその克服に立ち向かっていくことこそが大切だ，という観点が明確に打ち出されている。子どものなかに同時代人としての苦悩を見，わが身と重ね合わせてとらえるならば，そこから必然的に共感と語り合いが出てくるというわけである。このような地平に立つことこそが現在の子どもの非行・問題行動へのアプローチとして必要だし，重要だといえよう。

高垣忠一郎は，「少年の発達の危機」といわれるが，「『危機（crisis, Krise）』という概念は本来，『峠』『分れ目』『岐路』といった意味を含んでおり，否定と肯定，破壊と建設，退行と飛躍といった両側面の可能性を胎んだ分岐点をさしている」[15] と述べている。 このような把握は大切だと思われる。今日子どもの発達に関して著しいゆがみが生じているが，それは全く否定されるべきものとしてとらえるのではなく，うまく指導していけば，発達の「飛躍」を生みだし，「自立」への旅立ちへと自ら向かわせることが可能になる，ととらえる必要があろう。

それは表面にあらわれた非行・問題行動への対処に追われるのではなく，その背後にある子ども

の心のゆれや葛藤を見ることの重要性を私たちに教えてくれる。

竹内常一は，「子どもの行動はつねに両面的，両義的である。そのわけは，今ある自分とその『世界』に反抗はしていても，それらからの自立した『わたし』が未成立のために，またしてもそれらにとらわれるからである。能力主義，管理主義に反発していながらも，その反発をそれらに依拠して行なうほかないからである。」[16] と述べている。

こうとらえると，非行・問題行動をおこす子どもの心が見えてくる。教師が誠意をもって話しかけ，約束しても，そういう子どもは教師の期待を裏切るような行動をやってしまう。必ずといっていいほどである。そういう事態に対して教師は，子どもは簡単には変わらないのだ，諦めてはいけないと自己を納得させながら，また取り組みを開始するわけだが，なぜ裏切るような行動をするのかという思いは潜在的に残ったままである。こうして苦しい思いのまま取り組みを継続することになる。竹内の説明は，裏切る行動の内面のメカニズムを示しており，納得がいく。

このような内面のメカニズムのために，「わたしたちは子どもたちの行動のなかの肯定面，積極面をしばしば見おとしてしまう。わたしたちにとって必要なことは，こうした両義的行動のなかで，『わたし』の自立を求めてさまよっている子どもの内面的なドラマを見通すことである。子どもの行動の外面的な意味だけに目を奪われるのではなく，その行動の内面的な意味を見きわめなければならない」[17] ことになる。

このように行動の内面的な意味を見きわめると同時に，そうした内面の葛藤に対してどう方向づけていくかを考えなければならない。彼に「自立」のために不可欠な基礎的能力と，どう生きるかの見通しを与えていかなければならない。[18] ここを切り開くことなしには，彼の「内面のたたかい」を組織し，方向づけていくことはできないと思われる。一人ひとりの教師が能力主義・管理主義にとらわれているために，その切り開きは困難であるが，そのことなしには現実の非行・問題行動は打破できないであろう。

注

(1) 横川嘉範・服部潔『子どもにいま何が起こっているか』高校生文化研究会，1979年，16ページ。

(2) 田宮輝夫・釈鋼二・内山富佐子「てい談・心にわけ入り集団の教育力を組織する」，『子どもと教育』1983年5月号。15ページ。

(3) 前沢泰「現代の非行・問題行動的事態と集団づくりの課題」，『生活指導』1980年9月号，12ページ。

(4) 藤井敏彦「現代社会と今日の子ども」，佐藤正夫編『現代道徳教育の原理と構造』亜紀書房，1969年，45ページ。

(5) 竹内宏『続・路地裏の経済学』新潮文庫，1983年6月，71ページ。

(6) 小此木啓吾『家庭のない家族の時代』ＡＢＣ出版，1983年2月。

(7) たとえば，横川嘉範「仕事をどう教えるか・小学校低学年」，『生活指導』1983年4月臨時増刊号。

(8) 久富善之「生活・地域の変貌と教育」，『科学と思想』第48号，1983年4月，66～69ページ。

(9) 須藤敏昭「子ども・青年のメカ志向を考える」，『国民教育』第57号（1983年夏季号），1983年7月。

(10) 高垣忠一郎「少年期の発達の危機と自立の課題」，『生活指導』1982年11月号。

(11) 佐田智子『新・身分社会』太郎次郎社，1983年6月，12～14ページ。

(12) 竹内常一「今こそ，学校と地域を通して，社会的正義を追求する子どもを育てよう」，『生活指導』1981年8月号，17～19ページ。

(13) 竹内常一，前掲論文，20ページ。

(14) 竹内常一，前掲論文，21ページ。

(15) 高垣忠一郎「少年期の発達の危機と自立の課題」，76ページ。

(16) 竹内常一，前掲論文，21～22ページ。

(17) 竹内常一，前掲論文，22ページ。

(18) 前沢泰「現代の非行・問題行動的事態と集団づくりの課題」，18ページ